

PRESS COLLECTIVE

— autumn 2025 —

collective vol.52
13th September 2025
@event space 雲州堂



https://collective-music.com/

edit:tawaki text:tawaki, yu, Itaru Wakui, KMA a.k.a. Kengomatsui, 楠田行展 design:yukiokimura.com

book review



ジェシー・サンダース『ハウス・ミュージックその真実の物語』(2019 / Pヴァイン)

Itaru Wakui

ジェシー・サンダースと聞いて「ああ、あの」とすぐにわかる方はそうそういないだろうと思われませんが、いったいどういう人かといいますと、この人こそが世界初のハウスのレコードをリリースした人物なのであります。本書は1962年シカゴ生まれのジェシーが綴った自叙伝であり、またハウス誕生の物語というわけです。

シカゴのJes Say Recordsから1984年にリリースされた「On & On」というその曲をYouTubeで聴いてみますと、世界初にしてすでにクラブとベースが特徴的でないかにもシカゴ・ハウスというサウンドをしています。参考までに、1984年のオリコンの年間シングルチャート第1位はワラベ「もしも明日が。」で、年間アルバムチャート第1位はマイケル・ジャクソン「スリラー」です。

ハウス・ミュージックという言葉はシカゴのゲイクラブ「ウェアハウス」

book review



西村公輝(監)・猪俣恭哉(編)『シカゴ・ハウス大全』(2025 / DU BOOKS)

tawaki

本書はシカゴ・ハウスを紹介するテキストガイドです。ハウスというマイナーな音楽の、さらに特定都市に焦点を絞り込むアプローチに驚かされます。僕は普段テキストガイドをあまり読まないのですが、本書はcollectiveと縁の深いmole music店主のmitsukiが執筆者に名を連ねていることもあり入手しました。

本書は全8章の構成で、時系列に沿ってレコードが並ぶ形式です。第1章「プロト・シカゴ」ではハウス誕生前夜のディスコ古典が紹介されます。第2章「オリジナル・エラ 1984-1990」ではフランキー・ナツクルズ・マッシュル・ジェファソン、ミスター・フィンガーズなど、重鎮の名作が数多く登場します。第3章「セカンド・ジエネレーション 1987-1999」では主に1990年代のシカゴ・ハウスが取り上げられています。シカゴ・ハウス第2世代と称されるグレン・アンダー

グラウンド、ロン・トレント、シエ・タミエなどの作品が多く紹介されています。

第4章と第5章では「ゲッターハウス」と「ジューク/フットワーク」というシカゴ・ハウスのサブジャンルが紹介されています。これらの章が本書の独自性を強く打ち出しています。特に「ジューク/フットワーク」には多くの紙幅を割いていて読み応えがありました。

第6章「モダン・エイジ 2000-2012」と第7章「リターンポラリ2008-2024」は2000年代以降にリリースされたシカゴ・ハウスが紹介されています。前述の3冊とはこの2つの章で多くの盤を紹介しています。

本書は濃密なディスコガイドですが、主要なレーベルやアーティストの体系的な紹介があれば尚よかったですと思います。また、せっかくシカゴにフォーカスするのであれば、地理的な特徴や社会背景も詳述してほしいです。シカゴ・ハウスの誕生からおよそ40年が経過して、かれらを取り巻く状況がどのように変化してきたのか、そこが通読後に気になりました。とはいえ紹介されている音源の多くはYouTubeやサブスクで聴くことができます。シカゴのローカルで鳴っていた／鳴っている情景を想起する導きとして本書は大いに役立っています。



「黒潮の大蛇行が終わったから今年の夏は猛暑がこない可能性ありますよ」

夏嫌いに期待を抱かせるような説がSNS上でまことしやかに流布された。なお、結果はご存じのとおり。夏の食への指向は、暑さへの向き合い方とシンクロする。脂っこく、肉肉しいもので構成されたスタミナ系を盛んに食べ、夏に立ち向かおうとしたあの頃は彼方に。近年は夏野菜やさっぱりと体を癒し、調える向きの副菜に惹かれる。

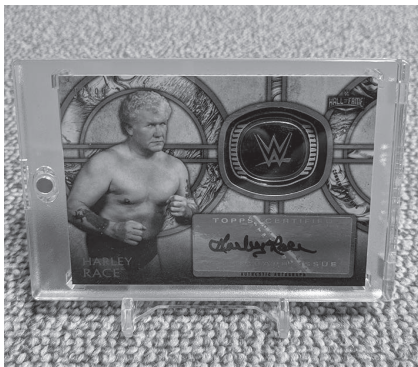
魚介類の旬も夏野菜と同様、色々あるが、今回紹介するのはタコ。夏から11日目を指す半夏生は、世間でこそってタコを食す日となっている。田植え後の苗がタコ足の吸盤のようにしっかりと根を張るようになるとの祈りを込めた古くから伝わる風習が由来だが、農家ならずとも豊作を期待したいところである。

そんな夏の入り口の食卓を鮮やかに彩るマダコは是非生で丸ごと買って自宅で茹でることをおすすめしたい。小さめのもは手頃だが、汎用性を考えるならキコぐらいの個体を買うのが理想だ。内臓を外したら足を2本ずつと頭に分けてその日に使わない分はジッパー袋で小分けにして躊躇なく冷凍している。タコは筋繊維が強く、加熱すると硬くなりやすいが、冷凍、解凍するところ程

度筋繊維が破壊されるため物理的に麺棒などで叩く工程を省くことができ、副次的効果として体表のぬめりも取れやすくなる。塩揉みしてぬめりや吸盤に詰まった汚れなどをこすり落とし、きれいに水で洗い流す。最後のひと手間として片栗粉をもみ込んで洗い流せば完璧だ。

グラグラと湯を沸かしたら色出しのため少量の醤油を入れ、足を掴んで鍋に入れていく。足の太い方(股の部分)だけ先に浸かるように入れ、20秒ほどそのまま茹で、足先までをドボンと入れて30秒。サッと用意したザルの上に丘上げて粗熱が取れるのを待つ。鮮やかな発色に、立ち昇る湯気。この粗熱が取れるまでの時間が好きだ。しっかりと火が通りつつ、柔らかく、みずみずしい仕上がり。これ以上の茹で方はない。もうスーパードゥでここには戻れない。ぜひやってみてほしい。

茹で上がったタコはシンプルにたこぶつとして食べてもいいが、夏は酸のある味付けと合わせるのが吉だ。三杯酢を用意してきゅうり、わかめ、針生姜と一緒にキンと冷やして酢だこにするのがおすすめだ。三杯酢が酸っぱすぎず苦手だという方は梅干しを叩いて和えたり、柑橘系の身を和えたり、他の夏野菜やハーブと組み合わせた洋風のアプローチも面白い。チョイト一杯のつもりで合わせるのはキュッと冷えた日本酒か、それとも白ワインか。こんな感じで夏をやり過ぎます。



昔から蒐集癖(しゅうしゅうへきの強さ)には自信がある。趣味・研究のために特定の品物を集める意味での常用外の漢字をあてるようだ。レコードやCDといった音楽メディアもだが、ミニカー、塩ビ人形、シールなど思い返せば子供の頃からさまざまな物を蒐集してきた。自宅にはそれらが当時の思い出とともに保存されている。

コロナ下、鬱屈した気分を払拭しようと某プロレスショップに通うようになった。気持ちが昂るプロレスレコードを目当てに店へ赴いたのだが、レコードについて今回は語らない。覆面、書籍、DVDなどあらゆるグッズが並ぶ店内を見渡し、レコードの在庫チェックを終えたとき、棚に収められた十数冊のシステムアルバムが目に入った。トレーディングカード(トレカ)が収納されたア

ルバムの束だった。

トレカは19世紀後半の米国でタバコのおまけとして付属されたのが起源という。現在は専門メーカーがトレカをトレカとして販売し、ゲームを行うためのカードと趣味として蒐集するものに大別され楠田は後者を好む。日本で、カードをカードとして売られるようになったのは1991年。ベースボール・マガジン社が販売した「BBM 91ベースボールカード」が始まりだ。私がスポーツトレカを初めて買ったのは「BBM 96」プロレスリングカードスパークリングファイターズ(SF)だ。だが、趣味の多様化が進み経済的理由も重なりトレカ蒐集は長く続かなかった。

件のプロレスショップでは、その後シリーズとして続いたプロレスカードが歴年で収められておりバラ売りしていた。SFのカードに懐かしさを覚えながら、良い写真が採用されたトレカに目をやるうちに心の火が再燃するのを感じた。店主と会話が弾み、滞在は1時間を越えた。アルバムから「BBM 2000 全日本プロレスカード」と「BBM 2002 新日本プロレス30周年記念カード」を10枚ほど抜き取り、帰宅した。

楠田が持つレコードは約2,000枚。カードの方は、プロレスショップのほかスポーツカード専門店、通販サイト、海外のマーケットと仕入れ先が拡大傾向にある。着実に増えるトレカ。枚数は取って把握しないことにしている。

That Wasn't A Dream / Pino Palladino & Blake Mills



(2025 / A New Deal Records, Impulse! Records, Verve Label Group)

皆様こんにちは。COLLECTIVEへようこそ！21回目の夏がやって来て、通り過ぎて行くこととしています。ね、いつもありがとございます。そして酷暑お見舞い申し上げます。

21年前の夏はここまで暑くはなかったですけど、やっぱり暑くて、雲州堂の室内と外の強く明るい日差しとのコントラストが、僕にとっての夏のイメージ。21年も繰り返しているの、もう僕は一生このイメージから離れられないです。

今年の夏は、Apple Musicがオススメしてきたのだったか、このアルバムを繰り返し聞いていました。

真夏の、冷房の効いた室内で聴くに気持ちのいいギターの音。Pino Palladinoは、僕はネオソウルのベジスタとして知ったのですが、年齢を重ねてこういう作品も作るというの、素敵だなと思います。皆様の夏の残りが良い時間でありませうに。それではまた次回！

(KMA a.k.a. Kengomatsui)